

これからの幸せ 第4回 in 福岡

2023年6月6日(火) 福岡国際会議場 | 主催 浄土宗 後援 西日本新聞社

第一部 講演

モーリー・ロバートソン(国際ジャーナリスト、ミュージシャン)

第二部 座談

俵 万智(歌人)
吉田 武士(白龍山長安寺僧侶、通称“カレー坊主”)
モーリー・ロバートソン
戸松 義晴(浄土宗総合研究所副所長)※コメンテーター
笑い飯・哲夫(漫才師)※司会進行



日本アメリカで右往左往(モーリーさん)

モーリー・ロバートソンさんは、アメリカ人医師の父、日本人新聞記者の母のもとニューヨークに生まれ、日米を行き来して育ちました。中学の時、広島で学級委員も務め日本に馴染んでいたモーリーさんは、アメリカに戻ると大きな衝撃を受けます。「日本では、人に思いやりをもち、悪いと思っただけで自分が謝るのが当たり前でしたが、アメリカは、『謙虚にしていると悪者にされる』文化だったんです」

「先に謝まるな」「先生を疑え」「自分の頭で考えろ」——日本で身につけた常識を覆されて広島の高校に戻ったモーリーさんは、日本の学校が求める“優等生”ではなくなっていました。



七転八倒の果てに辿り着いたモーリーさんの幸せの原点。「自分自身に出会うということが大事かも」と締め括りました。



七転八倒の果てに自分自身に出会う

モーリーさんは音楽好き。ディスコ通いなどで“不良”とされて退学し、母の故郷・富山県の高校に転入。過激な“パンクロック”のバンドで活動。「パンクバンドから東大合格者が出たら有名になれるぞ!」という仲間の発言に触発されて猛勉強、東京大学とハーバード大学に同時合格して一躍注目の的。取材が殺到しテレビの出演依頼も舞込みましたが「バンド仲間から『目立つのはおまえだけ』と除名され、目の前に大きな穴が空きました」
渡米してハーバードに入学するも、授業は想像以上の厳しさ…折れそうになったとき、電子音楽の教室に出会います。

当時、最先端の芸術は「私とは何か?」「世界とは何か?」といった哲学と結びついていて、そこにいたのは同じハーバードでも仙人の世界に生きるような人たち。「ドレの間には無限の音階がある」と説かれ「じゃあ自分と自分以外の境界はなく、宇宙はひとつつながりなのでは?」と考えたり…それから全米あちこちを旅し、様々な自己探求を重ねたあるとき「あ…これでいいんだ、と身が軽くなったんです。不健全で、傷ついていて、バランス悪くて、わかってももらえない俺だけど、そんな自分が好きだ。自分で選んでここまで来た、その全てに意味がある…そう思えたんです」



何気ない小さな幸せに気づく(俵さん)

第二部の座談では、まず、俵万智さんが自作の短歌を紹介しながら、それぞれに詠みこまれた「幸せ」について語ります。「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日
第一歌集『サラダ記念日』(1987年)の表題作を、「いまSNSで『いいね』の数を競う風潮がありますが、これは、たった一つの『いいね』で幸せになれるという歌」と紹介。次に、何気ない日常の中に気づく幸せ、として…
「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ
次は視点を変える妙が詠まれた1首…
散るといふ飛翔のかたち 花びらはふと微笑んで枝を離れる

「散る花びらは、むしろ自由になって、次へ命を繋いでいく…そんな風に考えるのもいいんじゃないかな、と」
蛇行する川には蛇行の理由あり 急げばいいってもんじゃないよと「蛇行する川は湿原全体に水を配っている…昨今『コスバ』『タイパ』とか言いますが、蛇行にも理由と味わいがあるんです」次に「言葉を大事にすることが幸せに繋がる」として…
つかうほど増えてゆくもの かけるほど子が育つもの 答えは言葉
俵さんは「日常の小さな幸せに気づくために、短歌をつくることは役立ちますよ」と締め括りました。

わかりあえないからこそ、言葉をつくそう(吉田さん)

長崎県大村市の寺に勤める吉田武士さんは、通称“カレー坊主”。お釈迦様といえばインド、インドと言えばカレーということで、キリストの誕生日(クリスマス)に比べ知られていないお釈迦様の誕生日を知ってもらおうと「4月8日にカレーを食べよう」と様々に活動。自身が地元で営む「子ども食堂」(貧困家庭の子ども支援)でもカレーは大人気です。
そして吉田さんは、子ども食堂の運営を巡る様々な意見収拾の困難さ、自身の父親

との考えの相違を例に、「人はわかりあえないもの」という話を始めます。「無量寿経に『人は一人で生まれ一人で死んでいく。誰も替わることはできない』とありますが、私たちは根本的に独りで、その悲しみを背負っている。だからこそ言葉を尽くして語り合うことが大切。カレーを食べながら『おいしいね』と声をかけあい、つらさ、悲しさも含めて語り合える場をつくっていったら」と締めくくりました。



それぞれの“幸せのヒント”

戸松義晴さんがコメントします。「モーリーさんは、まさに七転八倒を経て『ありのままの自分でいいじゃないか』と気づかれた。法然上人が厳しい修行をしたが「これでは救われない」と、念仏の教えに辿り着いたことを思います」
「俵さんの歌は人間関係の温かさがじんわり伝わってきて救われます。人間は独りぼっちだからこそ、日常の小さな幸せが大切と考えさせられました」
「吉田さんの作った、この『ほとけさまのやさしい精進カレー』は肉、乳製品、化学調味料を使わず、子どもに『やさしい』のが由来。彼の思いが詰まっています」
そして、皆さんそれぞれの“幸せのヒント”が語られます。

「今朝、初夏の生命力あふれる桜並木を見て美しいと思いました。“桜は花の時期”という思い込みを変えるだけで素敵な幸せが見つかります」(モーリーさん)
「幸せは、探すものではなく感じるもの。感じられる心を耕すことが大事だと思います」(俵さん)
「黙々と食べ、食べ終わるとさっさとテレビを見ている…何も考えず、そのときどきを生きる子どもの姿に幸せを感じます」(吉田さん)
「笑顔は基本です。ありのままの自分を認めて、まず自分に微笑んでみる。それができたら、人に微笑みを返していく。幸せはこうして広がっていく」(戸松さん)
最後に哲夫さんが「幸せだから笑うんじゃない。笑うから幸せなんだ」という言葉を紹介して締めくくられました。

